

ともだち

片野晃司

ホームを切り裂いて列車がページを捲っていく。同色の制服に制服を重ね着してずきずきと圧密する、頭痛がちな通勤電車のようにきつく綴じられた紙の隙間を押し開き、ぼくと膝頭から胸元まで触れるほど巧妙に組み合っているきみに、この前のページの出来事をぼくは教えないし、この次のページで何が起きるかもぼくは教えない。たとえば

《永きにわたりご愛顧いただきました言語ではございますが》

ぼくたちを充滿したこの通勤電車が鉄橋を渡り、腰つきの丸みを帯びた川筋沿いに小さくなつていく精密の先へ視線を辿ると、雁行して近景から遠景へと追いつきながら高速度できみと並走する、鈍色のふたつの頂点をもつ山影がみえる。きみは

あの山が見渡すこの平野を覆う蛹の殻のように、すべてが言語で説明されているのを見ることが出来るだろう。でも

それはあの山から見渡せるこの平野に限つてのことだ。その先のことにはぼくにはわからない。きみとぼくの

すべての始まりがどこにあつて、きみとぼくのすべてのおわりがどこにあるのか、いま

こうして詰め込まれ向かい合つていくぼくにはわからないこと。たとえばこの先のページのことをいまぼくが教えないように。充滿したひどくひどいきれにもみしだかれるこの通勤電車の、きみに

向かい合い触れ合うぼくときみがこれまでになく密着して、充滿したぼくときみの狂おしく重複する説明たちが殻を軋ませるとき、きみはその殻のなかですこし身じろぎをする。たぶん

《永きにわたりご愛顧いただきました言語ではございますが》

誰かが同じことをどこかで説明している。つまり

この通勤電車の同種の細胞の集合体のように渾然と揺れている、その一部を摘出して、どれかがぼくであり、どれかがきみであり、こうして膝の間から胸元までが触れるほどにきつく組み合っているあいだ、これがほんとうにぼくたちなのか、そもそもぼくたちはほんとうにもだちなのか、その

疑念がきみについての説明にはじめから含まれている。ぼくは

ここにいて、ぼくのことをきみが説明できるのなら、ぼくは説明そのものであり、これは説明そのものだ。たとえばぼくがきみを説明できるのなら、きみは

説明そのものであり、ここにあるこの説明がきみだ。いまぼくの胸がきみの胸にふれる、その

感触を言葉にしてしまうとき、ぼくは

きみを覆う蛹の殻に触れた気がする。きみがいま

蛹の殻のなかですこし身じろぎをした気がする。扉が開き

《永きにわたりご愛顧いただきました言語ではございませんが》
《このたびサービスを終了させていただくこととなりました》

どこかで聞いた説明が入ってきてすこし狭くなる。扉が開き

どこかで聞いた説明が入ってきてまた狭くなる。きつく
綴じこまれてぎりぎりど頭痛がちな制服のすきまで、ようやく
きみとぼくのこと、走り去っていく風景のこと、すべての
ことがらが説明され尽くされたことがわかる。いま
ページの隅で通勤電車は停止して、きみは
このページを閉じようとしている。

(詩誌ガニメデ五十一号掲載 2011年4月)